

第4の昼の中間点

7月3日、4日：エルサレムの抱擁

「エルサレムの抱擁」の目的は、平和的な経験—すべての人々にとって自由と喜びに満ちた人生—を促進することです。エルサレムの抱擁は、愛と尊敬、すべての人々との統合にフォーカスします。参加者はこの意識をもって、エルサレムの旧市街の壁の周りに散らばり、手をつなぎ、歌い、すべての人々のために平和と尊敬の祈りを行います。

エルサレムの抱擁と2012年6月6日のヴィーナス・トランジット*

アラブ・イスラム世界が、正中線が消滅することの影響を受けるのであれば、それは中東における起源が同一の宗教との関係ではどのような意味をもつのでしょうか。すでに見てきたように、アブラハムを信仰の父とする3つの宗教はいずれも、国家アンダーワールド（第6波）の二極性を起源とし、ユダヤ-キリスト教が昼の期間に拡張したのに対して、イスラム教は夜の期間に拡張したため、より集団的な性格をもつというエネルギーの違いがあります。もし、今、国家アンダーワールドの時期にもたらされた支配的な意識が終わろうとしているのであれば、世界平和のための極めて重要なステップとして、これらの宗教間に存在する敵対的分断がなくなっていくのでしょうか。しかし実際には、銀河アンダーワールド（第8波）における戦争や暴力の多くが、エネルギーの違いを背景とするイスラム教とその他の宗教（さらにイスラム教の異なる宗派間における）との対立の反映でした。

それにもかかわらず、これらの宗教には、未来の平和について語る予言があります。キリスト教では明白にヨハネの黙示録で永遠の平和を約束しています。イスラム教では終末にキリストが登場し、イスラムに人々をもたらすと予言されていますが、イスラム教を家父長的な規則の塊としてではなく、「神に身を委ねること」と理解するならば、これはさほど違和感を覚えることはありません。世界で最も古い宗教である（ゆえに最も教条的ともいえる）ユダヤ教もまた二極性のシフトの影響を受けて平和へと開かれることでしょう。主要な一神教の間に平和が確立されるなら、地球全体の平和への大きなステップとなります。これら3つの宗教の分裂が最も顕著に現れているのがエルサレムの旧市街です。そこでは、それぞれの宗教がよそ者の侵入を防ぐための監視が絶えず行われています。しかし実際には、エルサレムの旧市街だけに異教徒が行くべき場所を規定する目に見えない境界線があるのではないのです。宗教的分断の上にさらに築かれた国家的な分断によって、パレスチナ人やユダヤ人は時として文字通り物理的な壁によって隔てられるのです。

東西の分断は、過去5000年間、国家アンダーワールドがもたらした意識のフィールドが、東経12度線で分けられるふたつの半球に極性を作り出したときからの重要なテーマでした。これが背景としてずっと残っているのです。しかし、惑星アンダーワールド（第7波）第7の昼はベルリンの壁崩壊をもたらし、東西の政治的分断の極端な表れであった冷戦が終結しました。それでも宗教的な二極性は残ったままで、銀河アンダーワールドでは、イラクやアフガニスタンにおける戦争という形で、一層極まったように見えました。原因は、銀河アンダーワールドで、東に光がもたらされたことによるイスラム再浮上の作用です。逆説的ですが、イスラム諸国は同時に蝕まれてゆくような傾向をみせています。チュニジア、エジプトなどのアラブ諸国における暴動により、中東の政治的な地図の引き直しが必要に思える現在でも、アブラハムの宗教間の緊張を解くための明確な手段がとられているとは思えません。

エルサレムは東経 12 度に位置する都市ではありませんが、さまざまな理由により東と西の極性を抱えることになりました。伝統的な意味での東西ふたつの民族、アラブとユダヤを分断するだけでなく、西のものとされるユダヤ-キリスト教、そのしきたりと分布によって東のものとされるイスラム教という 3 つの宗教を分断させています。エルサレムはそのような特殊な都市なのです。それでは、エルサレムにある壁は、かつてベルリンの壁が崩壊したように、マヤ暦第 8 波と第 9 波がもたらす二極性の意識のシフトにより、崩壊するのでしょうか？これは冷戦の終結よりもはるかに深いレベルにおける東西分裂の終焉を意味します。エルサレムは世界最古の都市のひとつであり、ふたつの宗教の聖地としておよそ 2000 年の歴史があります。アブラハムの宗教にはすべて、この都市の運命に関する重要な予言があり、信者の多くは自分の信奉する宗教の予言だけが成就するものと信じています。現在、統合意識を作り出している第 9 波の観点からすると、そのような排他性自体があり得ないことといえるのですが。

ヨハネの黙示録では、終末の混乱のあとに新しいエルサレムが出現すると予言されています。これは新しい世界の誕生を意味するのでしょうか。それとも実際の都市ではなく、新しい意識の枠組みを意味するのでしょうか。いずれにしても、エルサレムは地球の重要な縮図であり、それゆえエルサレムに平和がもたらされれば、世界中が平和になるといえます。逆もまた然りです。エルサレムにおける根深い文化的、国家的、宗教的な分裂を超えられたら、世界中のあらゆる場所で同じことが可能になるでしょう。

エルサレムの抱擁は、これらの分裂を超えることを祝うのです。平和に至るために、国家や宗教に関係なくエルサレムの旧市街を愛する人々が、愛の表現を行うのです。エルサレムの抱擁は、2007 年 5 月 20-22 日、銀河アンダーワールド第 5 の屋の中間点に「ブレイクスルー（突破）のお祝い」としてドボラ・パールマンとロブ・スキュムラによって提案され、ジェームズ・トゥワイマンのサポートを得て始まりました。以来、年に一度のイベントとして続いています。旧市街を包みこむ指輪のような人々の輪が、人々の間に存在していた多くの境界線を溶かし、この場所はみんなのものであるという経験をもたらしました。イベントにはさらに素晴らしいアート・プロジェクトが加えられました (<http://www.jerusalemhug.org/>)。

第 9 波の統合意識に入った今、エルサレムの抱擁は、エルサレムだけでなく、全世界のための平和にフォーカスした有意義で楽しいアクションとして、全世界を統合する可能性を秘めています。多くの方々が実際にエルサレムに行き、抱擁に参加したいと思うでしょうが、その周囲にいくつかの輪を創ることで、グローバルな大イベントにできると思います。コンシャス・コンバージェンス（意識を束ねること）によって再生されたグローバル・メディスン・ホイールをエルサレムの抱擁をサポートする外側の輪として、再び活性化させましょう。これには、西のマヤの長老、北のスカンジナビアの人々、東ではバリとシンガポールに集まったインド人や中国人、南のブッシュマン等、多くの人々が参加しました。アメリカ原住民のメディスン・ホイールをモデルとして、グローバルな規模で聖なる土地の再生の儀式が行われたのです。今年と来年のヴィーナス・トランジットに行われるエルサレムの抱擁では、グローバル・メディスン・ホイールを「抱擁の輪」という形で再び創造すべきでしょう。それは大きな輪につながる小さな輪を創ることで補充されます。いくつかの抱擁の輪は、抱擁によって溶かす必要のある、人々の間の境界が強くなっている他の地域をも包みこむことでしょう。

2011年には、マヤ暦第9波の一環として7月3日（第4の昼の中間点）におけるイベントがあります。さらにマヤ暦の到達点となる2011年10月28日以降に行われるのが、2012年6月6日ヴィーナス・トランジットにおけるイベントです。それは、私の理解では2004年6月8日のヴィーナス・トランジットがもたらした緊密なスピリチュアルの変容が幕を降ろすときです。マヤ暦の終わりに訪れる2012年6月6日ヴィーナス・トランジットにおけるエルサレムの抱擁は、実にすべての人々、とりわけ第9波の統合意識を顕現する人々が待ちわびる未来の灯台の明かりとなるでしょう。そして、二度と昔の対立的なあり方に戻ることはないという決意を示す最高のお祝いになるでしょう。

*ヴィーナス・トランジット（金星の日面通過）とは、[金星](#)が地球と[太陽](#)のちょうど間に入る[天文現象](#)。地球から見ると、金星が太陽面を黒い円形のシルエットとして通過していくように見える。